

「福祉文化セミナー in 奄美」報告書

関西ブロック 岡村 ヒロ子

1. セミナーの目的

今も祭りや伝統行事が集落ごとに残っている長寿の島、奄美大島を訪ね、その自然豊かな大島が辿った歴史、息づく伝統文化・精神文化・食文化・現物経済等々の奄美文化を見聞する。さらに長寿者と交流し、コミュニティの絆（＝結いの文化）を紐解く。

2. 日程

・2014年8月9日（金）～8月31日（日）2泊3日

3. 参加者：10名

- ・学会員：富澤 公子・長尾 玲子・岡村 ヒロ子
- ・非会員：富澤 奈美・松尾 典子・桜井 詔子・島田 恵子・磯田 弘子
長尾 昌隆・長尾 理世

4. 奄美群島の紹介

- (1) 地理・自然；鹿児島県の南部（北緯28度、東経129度）に位置し、面積712km²、本州の4島を除くと佐渡に次ぎ面積5位の島。694mの湯湾岳が最高峰。島全体が森、リアス式海岸。サンゴ礁の美しいマリンスプルの海が広がる。海洋性亜熱帯。日照時間は日本で最短。
- (2) 人口；11.8万人（そのうち6割強が奄美大島に住む）
自治体；奄美大島の市町村（奄美市・龍郷町・宇検村・大和村・瀬戸内町）
- (3) 産業；農業（サトウキビ・サツマイモ・米<二期作>）・漁業（マグロ・クルマエビ・タイ・真珠の養殖）・果樹園（たんかん、すもも、マンゴなど）・観光

5. 内容

(1) 「奄美の結いの現状」

話し手；「奄美の寅さん」こと花井 恒三さん（内閣府地域活性化伝道師）

・ 「奄美の寅さん」花井 恒三さんのプロフィール

役所を定年退職し、得意分野の奄美の文化について語り継ぐ一人ボランティア、自称「奄美の寅さん」。奄美に住みたい人、研究したい人、音楽・踊り・絵画等々、様々な方法で表現したい人、投資したい人は大歓迎。多くの方々・大学生が研究テーマをもって奄美を訪れるが、花井さんはその道案内的存在。

<もともとの「結い」>

1. 田植え
2. 稲刈り
3. 黒糖づくり
4. 井戸さらい（さらい⇒掃除）
5. ハブさらい
6. 冠婚葬祭
7. 家普請（船を出して茅葺きの材料となる藁を運ぶ）
8. 道普請（建設会社は重機を出す。労働は集落の人々）
9. 地域清掃
10. 一重一瓶（節句）
11. 火災家屋の後片付け
12. 正月の豚殺し（何頭殺すかは協議）
13. まつり：八月おどり（一家から子供であれ老人であれ必ず一人出す）・餅貰い（奄美言葉：モチモレ）・敬老会（相撲大会＝お年寄りとの交流）・浜下り（奄美言葉：ハマオレ）
六月灯

<現代版「結い」>

1. 根瀬部集落のツワブキ（ツバサ）収穫作業⇒フキを採ってきて皆でお喋り・食事をしながら掃除をし、調理保存
2. 根瀬部集落のウニ漁（男性がウニを採り、女性が瓶詰をする。報酬は平等）
3. 無人市（一束100円均一）
4. 母さんの店（公設民営：母さんが運営）；住用町摺勝「サン奄美」、大和村大棚、笠利町節田等
5. 大熊集落の集会施設での「通夜」
6. 宇検村の共同納骨堂
7. 宇検村の共同売店
8. 加計呂麻島；「島全体が老人ホーム」と見立てる。区長が「園長」、民生委員がケアマネージャー、集落民がホームヘルパー。海上タクシーで島に渡り、ゆっくりコーヒー・カレーを楽しむのが最高の贅沢。心のミネラル、ナラティブな島。
9. 「能力」でなく「時間」の交換が「結い」：契約社会の第二通貨とは違う
10. 会費制冠婚葬祭⇒お返しなし：結婚披露宴（千円～5千円）、葬式（千円）、初盆（千円：お返しは飲物一本）、合同敬老会相撲（寄付）、合同年の祝（千円）<卒業祝（中学3年）、入学祝（小学1年）>
11. 押し売りにもお茶をあげる（節田集落）
12. 一重一瓶：浜下り（奄美言葉：ハマオレ）、モエ（模合）、隣り近所の寄り集まり（ヨレ・ヨライ）
13. 会費制飲み放題の居酒屋、スナックバー（二次会）、カラオケ：2千円（奄美観光ホテル・二次会カラオケ）、3千円（居酒屋・二次会スナック、バー、カラオケ）、4千円（島唄・郷土料理店）、5千円（結婚披露宴）、7千円（割烹）、1万円（大相撲力士・結婚披露宴）
14. 大熊かつお生産組合（同一労働同一賃金、さしみ500円均一）
15. 大和村の高齢農業者支援・奄美市生果市場行農産物配送車（有料）
16. 高齢者農作業支援若者グループ（有料）
17. 災害時ボランティア（小・中・高校生等：子供達に浸透してきた「結い」の精神）
18. 子供会は集落の構成団体：餅貰い（奄美言葉：モチモレ）・踊り他
19. 奄美まつり：郷友会と出身集落の融合まつり

<課題>

1. 「交際倒れ」への心配
2. 稲作文化の後退
3. 方言（島口：しまぐち）使えない子供達
4. シヤーマン（ユタ神様）の継承者がいない
5. Iターン者の一部との村落共同体運営の価値観の摩擦（会費・会合・行事等）

元来の「結い」と現代版「結い」を比較しながら、具体的な事例を交えてのお話を伺った。「田植え・稲刈り・黒糖づくり等の農作業」については一家族の力には限界があるので皆で助け合って順繰りに済ませる。たいへん合理的な方法である。一日、どれほど働いても報酬は出ない。労力は現金に値する通貨である。

私は今年、南米のペルー、ポリネシアのタヒチを訪れたが、今回、奄美を訪れてあまりに共通点が多いことに新たな気付きをもった。陸続きだったか、もしくは何らかの交流があったのではないかと思う。ペルーでも畑地の開墾、主食であるジャガイモの種芋植え等々は集落の人々が集まって皆で作業に励んでいた。終わると車座になってトウモロコシで作ったお酒を酌み交わし、食事のもてなしを受けていた。それが報酬となるのでお金は動かない。

また、タヒチの先住民の方々は月の満ち欠けに沿って種をまき、収穫をし、漁に出、

自分の行動まで決めていた。新月の時はたとえ親からの誘いでも絶対に外に出ない。自然には決して逆らわなかった。

奄美では旧暦の1日・15日に必ず墓参りをするという。民家のすぐ隣に、しかも塀もないところに墓がある。先祖といつも一緒にいる、死を忌み嫌うことはない。旧暦で行事を執り行う奄美と月の満ち欠けに沿って生活するタヒチもある意味、共通している。

「冠婚葬祭、まつり（八月おどり・餅貰い（奄美言葉：モチモレ）・敬老会（相撲大会）・浜下り（奄美言葉：ハマオレ）・六月灯）」等の奉りごととも集落の皆が労を提供し合い、力を合わせてやり遂げる。そこにお金は介在しないが、それ以上に集落到に住む人々の間にごく自然な形で強い絆が生まれる。それらが今なお引き継がれ、伝統文化となっている。

奄美の人々を「お金の目をしていない」と花井さんは表現した。奄美には暖かな気候、海のもの、山のもの実に豊かな自然の産物、住民間の絆、自然を敬う心がある。それらが日々あくせくせず、安心して日暮しができる源となっているに違いない。

現代社会に失われつつある「結いの文化」が息づいている奄美には人間本来の暮らしの原点を見る思いだった。

（2）大和村湯灣釜；蔵 久子さん宅訪問

久子さんの母「幸 ありさん」は一昨年106歳で亡くなった。「八月おどり」は幸さんの家から始まる。幸さんが亡くなくてもそのことに変わりはない。久子さんは名瀬に居を構えるが幸さん亡き後も家を守っている。DVD「長生きが幸せな島 ～奄美群島に息づく伝統文化とコミュニティのつながり～」では、縁側で座布団に埋もれてしまうのでないかと思うくらい小柄な幸さんがちょこんと座っていた。その幸さんが、なんとお囃子が聞こえ出すと見違えるほどしゃきとなり、白く長い指が自然に動き出したのには驚いた。手の動きがとてもきれいだったこと、なんとも静かな微笑みを浮かべていたことが目に焼き付いている。亡き幸さんの家に伺って、この縁側に幸さんが座っていたと思うだけで感慨深いものがあつた。一日のほとんどを横になって過ごしていたそうだが、襖は開けっ放しなので通りすがりの人と自由に言葉を交わすことができた。集落の人々にとっても幸さんにとっても心温まるひとときだったに違いない。開けっ放しというのがいい。伺った時、いくら声をかけても人の気配がない、もちろん中は丸見え。久子さんは祭りに行っていた。帰ってこられると汗まみれになって、次から次、手作りの郷土料理を出してくださり、その味は格別だった。庭に生っているグワバを長い竿で叩き落として、そのコツも教えてくださった。採れたてのグワバを口にした時の甘酸っぱい味がとても新鮮だった。久子さんが海で採ったあおさやもずく、畑で育てたゴーヤ・オクラ、ドラゴンフルーツ、自分たちで叩き落としたグワバ等々、たくさんの土産をいただき、再会を約束して幸さんの家を後にした。道中、ドラゴンフルーツパイヤ・島バナナがあらちらの道端や庭に生っている、なんと贅沢な自然環境だろう。奄美では敢えて地産地消なんていわなくてもいい。自然の恵みをいただいて生活を営んでいる。

（3）大和村のひらとみ祭り

ひらとみ祭りは、夏休み最後の8月末の土曜日に繰り広げられ、会場となる海辺は村

人、帰省してくる人々、観光客で埋め尽くされる。奄美の交通手段は車のみである。小学校の広い校庭、海辺が駐車場となり、会場から遠い海辺からはシャトルバスが出る。その対応ぶりに大和村の人々の心意気が伝わってきた。祭りは島唄や踊り、舞台でのアトラクション、島出身の歌手によるライブ等々が続き、クライマックスの花火で幕を閉じる。夜空に上がる花火と海面から上がる花火は圧巻だった。皆が唄い、踊り、手拍子をしている光景に、「これこそ祭り」といういつの間にか忘れていた感覚が、否が応でも蘇ってきた。美しいもの、迫力のあるものには、間髪入れずに歓声があがる、皆の思いが海辺いっぱい響き渡った。

(4) その他

1) 奄美パークでの伝統文化の見学

集落での暮らしぶり・生息する動植物をシネマ・展示で見聞

2) 田中一村美術館

栃木県から奄美に移り住んで、清貧の中、奄美の自然を描き続けた画家

3) マングローブカヌー体験

マングローブが群生する住用川のデルタ地帯をカヌー体験

4) 奄美大島開運酒造「れんと」工場見学

焼酎の歴史は古い。1953年、日本復帰を機に米麹を用いるという条件で黒糖を材料にした黒糖焼酎は奄美群島だけで作ることが許された。開運酒造では黒糖焼酎にクラシックを聴かせて貯蔵している。音楽の振動が焼酎の味をまろやかにすることは試飲をしてよくわかった。飲み口はあくまでも優しい。

6. 所感

同じ24時間を過ごしているはずなのに、どうしてこうもゆったり感が流れるのだろうか。奄美には10の「スロー」があるという。スローライフ・フード・ウェア・ミュージック・ダンス・経済（結い経済）・人・言語・教育・土壌・・・、納得。亜熱帯の森は一年を通して深く濃い緑色、しかも人の手がほとんど入っていない。もし、今のように道路が敷かれ、山と山をつなぐトンネルがなかったら、人々は隣りの集落とどのような方法で交流したのだろうか？ 険しい山越え、もしくは海まで出て船で海沿いに移動、どちらにしても気が遠くなる。台風の通り道でもある。いつも穏やかな美しい海とは限らない。

島唄や太鼓・踊りに何ともいえない哀愁が漂うのは歴史と深くかかわっているといわれている。薩摩のさとうきび収奪での圧政、過酷な労働を強いられた背景にある音律である。

文化面でも沖縄（琉球）、薩摩両方から、さらに中国・韓国、東南アジアからも影響を受けている。中道をいかざるを得ない立場が独自の文化を創り上げたものと思われる。大島紬・黒糖は中国から、黒糖焼酎・太鼓は東南アジアから入ってきたという。まさに文化の宝庫だが、大島紬が衰退の一途を辿っていることは寂しい。

奄美の寅さんは最後に「奄美は『ゆったり暮らそう日本列島』のモデルを目指している。奄美の人達には現金収入は少ない。しかし、長寿であり、子宝にも恵まれている。暮らしへの満足度は高いと思う。研究者の方には経済満足度の指標を作っていただきたい」と結んだ。なんとも大きなお土産をいただいた。